

「月やあらぬ」歌の解釈について

鈴木隆司

一 はじめに

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

業平を代表する名歌という評価のある一方、その解釈をめぐって古くから多くの議論がある歌としても知られる一首である。特に、宣長が、

此歌、とりどりに解きたれども、いづれも其意くたくだしくて、一首の趣とほらず。これによりて、今おのが思ひえたる趣をいはんには、まづ二つの「や」文字は「やは」てふ意にて、月も春も去年にかはらざるよし也。……「にして」といへる語のいきほひ、上句に、月も春もむかしのままなるに、といへるとあひ照して、おのづからふくめたる意は聞ゆる也。此人の歌、「心あまりて詞たらず」といへるは、かかるをいへるなる

べし。……

(玉勝間)

と述べて以来、二つの「や」が疑問であるのか反語であるのかという点は、最近に至るまでこの歌の解釈をめぐる議論の中心であつたし、「語のいきほひ」、「ふくめたる意」、「あるいは「心あまりて詞たらず」は、繰り返し疑問・反語説の議論の中で用いられてもきた。そうした意味で、『玉勝間』に記された宣長のこの歌についての解釈は、近代以降のこの歌に関する議論を一つの方向に導いていったとも言える。だが、この歌を解釈する上で、二つの「や」が疑問であるのか反語であるのかは、解釈上の重要な問題点であるにしても、この点の議論だけでこの歌の解釈が定まるというわけでもない。疑問か反語かという議論の陰に隠れて見過ごされてきた問題も多いように思われる。

本稿においては、これまであまり議論に上らなかつた問題を含めて、この歌の解釈に関して改めて検討してみたい。

二 「Aや〜Bや：」

疑問・反語説に分かれて議論が繰り返されてきた「月やあらぬ」歌の解釈が、最近では疑問説に落ち着いてきたのは、徳田政信氏⁽¹⁾、工藤重矩氏⁽²⁾の論に拠るところが大さいと思われる。徳田氏は、「や」を二つ重ねる語法が、当時の短歌においてどのように使われていたか⁽³⁾について、古今集九例をはじめとした二十二例について検討し、この語法をもつ歌で反語になるものがないことを示した上で、

「元来「―や―や」という語法の本質は、二つの事柄を並べて半ば疑い半ば肯定しつつ、ためらいあるいはたゆたっている気持をあらわす語法なのである」とする。一方、工藤氏は、徳田氏の論を踏まえた上で、「八代集には徳田氏の挙例の他にはなお六例があるが、やはり全て「疑問」の用法である」と指摘し、この語法が例外なく「単に疑問を列挙しているのではなく、くすなのか、それともくすなのか」と選択肢の中で答えを求めてとつおいつ考えて疑い迷っているのである」として、「月やあらぬ」歌の解釈については、「按ふに是は、月が去年の月とは異なるか、はた又春が去年の春とは異なる歟、この両者の何れかに依るならむとの意なり」とする飯田季治氏⁽³⁾の説を再評価している。

この語法を「たゆたい」とする徳田氏の結論と、「二者択一の疑問」とする工藤氏の結論については、改めて検討が必要であると思われるが、客観的な用例検討から結論を導くという、解釈を考える上では不可欠のことでありながら、「月やあらぬ」歌に関する議論としては従来あまり意識されてこなかったことであり、宣長説の束縛から抜け出したものとも言える。実際に、徳田氏、工藤氏の検討のとおり、平安時代の和歌でこの語法を反語に用いた用例は見出すことができない。

では、二つの「や」を重ねる語法については、「たゆたい」あるいは「二者択一の疑問」と例外なく考えることができるのか。まずは、この点について、平安時代の和歌で問題になりそうな例を挙げ、検討していくこととする。なお、二つの「や」を重ねる語法について、徳田氏と工藤氏は「―や―や」と示しているが、本稿においては、後の説明の都合上、「Aや〜Bや：」という形で示すこととする。

秋や来る露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける
(伊勢物語 十六段)

「男」と紀有常の友情譚として知られた章段であり、「男」の友情に感激した有常が「よるこびにたへで、また一詠んだとされる。新古今集にも、「業平朝臣の装束つかはして

けるに「紀有常朝臣」として収録される（一四九八）。この歌の「秋や来る露やまがふ」はそのまま訳せば「秋が来たのか、露が見まごうたのか」となり、実際にそのような解釈を付す注釈書もあるが、このままの訳であると「秋や来る」と「露やまがふ」の間に何通りかの解釈が可能になる。一つには、「秋が来る」ことよって「露が（置きその露が涙と）まがう」という関係で考えて、「秋が来たのか、それで露が（置いて涙と）見まがうようになったのか」というように、間に「それで」「そして」などを補う解釈であり、伊勢物語、新古今集いずれの注釈書においても比較的多く見られる解釈である。一方、「秋が来る」と「露が見まがう」の間を二者択一の関係で考えて「秋が来たのか、それとも露が見まごうたのか」とすると、このままでは理解できない。そこで、「秋が来て露が置いたのか、それとも秋は来ていないのに露が季節を間違えて置いたのか」とする解釈もある。現代の伊勢物語、新古今集の注釈書ではこのような解釈を示すものも多い。また、「秋は人を愁へしむる時なれば、秋が来て我が袖をしぼるか、また露がわが袖へまがひきてぬらすか」（肖聞抄）といった解釈も古注釈以来の伝統的な解釈としてある。こうして見ると、この歌も、「月やあらぬ」歌に劣らないほど多様な解釈が示されており、一定していない。いずれの解釈が適切であるか、結論は一旦保留して、次の例を見る。

契りおきし花の盛りを告げぬかな春やまだ来ぬ花やに
ほはぬ
（更級日記）

「そこなる尼に、「春まで命あらばかならず来む。花ざかりはまづつげよ」など言ひて帰りにしを、年かへりて三月十余日になるまで音もせねば」とあり、東山に滞在していた作者が都に戻った翌春、花の盛りを告げてほしいという願いが果たされないことを不審に思つて詠んでいる。この歌の解釈について、「春がまだ来ないので、それとも花が咲かないのですか」とする解釈を示す注釈書が多いが、「それとも」の語を加えた処し方が近註にまで継承されているようだが、ここは、Aか、あるいはBかと、何れの場合であるのかを問うているのではないから、穏やかではない。春の到来（季節）・桜の開花（花）といった両レベルの事項を畳み込む形で並列させていることに気づいておかなければなるまい」とする小谷野純一氏³⁾の批判がある。たしかに、この歌の詠まれた状況から考えて、「春がまだ来ない」とこと「花が咲かない」ことを単純に二者択一で尋ねて、その答えを何れかと求めているとは歌の詠まれた状況からは考えにくい。また、二つの「や」の解釈を、前述の「秋や来る」歌の解釈例に倣って、「春が来ていないために花が咲かないのですか、それとも春は来たのに花が咲かないのですか」と言葉を補って二者択一的に解釈することも考えられなくはないが、この歌の趣旨が、

花の盛りを告げてくれないことへの不審であるならば、このように花の咲かない理由を理詰めでも追求するような解釈はやはり不適切であろう。「春が来る」と「花が咲く」を並列的に捉える解釈で問題はないと思われるが、「春が来て花が咲く」はあってもその逆はないのだから、「春がまだ来ないのですか、そして花が咲かないのですか」、あるいは「春がまだ来ないのですか、それで花が咲かないのですか」といった解釈も考えられる。

春や来る人や訪ふとも待たれけりけさ山里の雪をながめて
(後拾遺集 四一〇)

「屏風絵に雪降りたるところに、女のながめしたるところをよめる 赤染衛門」として収録される。春の訪れとそれに伴う変化を題材とする点で、前述の「契りおきし」歌とよく似た「Aや／＼Bや：」であるが、こちらの方がより解釈に紛れはない。雪に降り込められた山里で、「春が来るか、人が訪ねてきてくれるか」と待つのは、「春が来るか、人が訪ねてきてくれるか、それとも春が来なくても人が訪ねてきてくれるか」と二者択一で解釈しようとするのも、これでは「春の訪れ」はどうでもよいことになってしまい、無理であろう。現代の注釈書においても、これを二者択一の疑問で解

釈するものは見られない。なおこの歌についても、単純に並列しても解釈できるが、「契りおきし」歌と同じく、「春が来る」ことよって「人が訪ねる」のであり、その逆はないのだから、「春が来るか、そして人が訪ねてきてくれるか」、あるいは「春が来るか、そうすれば人が訪ねてきてくれるか」といった解釈も考えられる。

春や来る花や咲くとも知らざりき谷の底なる埋れ木なれば
(和泉式部集)

新勅撰集にも「題知らず 和泉式部」として収録される(一一二〇〇)。この歌についても、「春が来たのか、花が咲いたのか」は、「谷の底の埋れ木」のような身にとってはそれいづれも知らなかった、という意味でしか解釈できず、これを「春が来たのか、それとも花が咲いたのか」とは解釈できない。

春や来し秋や行きけむおぼつかなかげの朽木と世をすぐす身は
(後撰集 一一七五)

「山里に侍りけるに、昔あひしれる人の、いつよりここには住むぞと問ひければ 閑院」として収録されるが、貫之集や新勅撰集(一一二〇一)には、

春やいにし秋やは来らんおぼつかなかげの朽木の世をすぐす身は

という形で収録される。新勅撰集は「題知らず 貫之」とする。作者の問題などいろいろと問題のある歌であるが、二つの「や」については、解釈上大きな紛れはない。後撰集の形であれば「春が来たのか、秋が去ってしまったのか」、貫之集、新勅撰集の形であれば「春が去ってしまったのか、秋が来たのか」、「かげの朽木」として世を過ごす身にとつては、そうした季節の移り変わりもはつきりしなくなつてしまふと嘆く歌であり、「春が来たのか、秋が去ってしまったのか」（「春が去ってしまったのか、秋が来たのか」）そのいづれもおぼつかないということではなければ意味が通らない。新勅撰集では、前述の「春や来る」歌と並んで収録され、内容だけではなく、歌全体の構造もよく似た歌になつている。

さて、ここまで見てきた例によれば、「Aや／＼Bや…」が必ずしも「たゆたい」や「二者択一」の意味になるわけではないように思われるが、右に挙げた例と、徳田氏、工藤氏がともに引用している古今集歌九首の用例を比較すると、一つの相違点に気づく。改めて古今集において二つの「や」を重ねる語形をもつ歌九首を見ると、

年のうちに春は来にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあ

るかな (一〇)

夜や暗き道やまどへるほととぎすわが宿をしもすぎが
てに鳴く (一五四)

えぞ知らぬ今ころみよ命あらば我やわする人やと
はぬと (三七七)

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありや
なしやと (四一一)

君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てか
さめてか (六四五)

君や来む我や行かむのいさよひに槇の板戸もささず寝
にけり (六九〇)

夢にだに逢ふことかたくなりゆくは我やいをねぬ人や
わするる (七六七)

世の中にいづらわが身のありてなしあはれとやいはむ
あな憂とやいはむ (九四三)

であり、これら九首の歌で用いられている「Aや／＼Bや…」は、

・「A」と「B」が、「去年」と「今年」、「我」と「人（君）」
というように対になる。

・「／＼」と「…」が同語（「いはむ」など）あるいは反対
の意味を持つ表現（「疾し」と「遅し」、「行く」と「来」
など）になつている。

のいづれかあるいは両方の条件を満たしており、意味を考

えても、「Aがく」ということと「Bが…」ということが両立し得ないものがほとんどである⁵⁵⁾。一方、「秋や来る露やまがふ」「春やまだ来ぬ花やにほはぬ」「春や来る人や訪ふ」「春や来る花や咲く」といった例は、語句そのものが対になっておらず、全体の意味を考えても「Aがく」ということと「Bが…」ということが両立し得るし、「春や来し秋や行きけむ(春やいにし秋やは来らん)」は表現としては対になるが、「Aがく」ということと「Bが…」ということとは両立し得る。

ここまで見てきたことによつて考えられることは、「AやくBや…」という二つの「や」を重ねる語法そのものには、「二つの事柄を並べて半ば疑い半ば肯定しつつ、ためらいあるいはたゆたっている気持」の意味があつたり、「二者択一の疑問」の意味があつたりするわけではなく、「AやくBや…」がどのような意味になるかは、「Aがく」ということと「Bが…」ということの間の関係によつて決まるのではないかと、ということである。「Aがく」ということと「Bが…」ということの間に二者択一的な関係があるのであれば「Aがくか、それともBが…」と解釈することになるが、「Aがく」ということが前提・原因となつて「Bが…」ということになるのであれば「Aがくか、それでBが…」と解釈することになるであろうし、両立する二つの事柄を並列的に疑問にしている場合であれば単純に

「Aがくか、Bが…」と解釈することになる。この語法自体に「たゆたい」や「二者択一」の意味があるかのように感じられるのは、古語であつても現代語であつても、通常二つの疑問を並べる場合に比較的そのような選択型の疑問が多くなるからであり、また和歌においては特に「Aやく」と「Bや…」を対句的に表現することが多いからではないかと思われるが、二つの「や」を重ねて用いる形が必ずしも選択的・対句的にだけ用いられるわけではないことは、ここで見てきたとおりである。右に検討した、「春や来し秋や行きけむおぼつかな」(後撰集)は、明らかに「君や来し我や行きけむおもほえず」(古今集)、「君や来し我や行きけむおぼつかな」(伊勢物語)を踏まえているが、それでも、「君や来し我や行きけむ」が二者択一の疑問になるのに対して、「春や来し秋や行きけむ」が二者択一の疑問の意味にならないことは、そうした意味がこの語法そのものに備わつたものでないことをはつきりと示しているのではないだろうか。そして、こうした点から「月やあらぬ」歌を見ると、「Aやく」と「Bや…」がはつきりと対になるわけではなく、「Aやく」と「Bや…」が両立し得る関係にあると考えられるが、詳細は次章で検討することとする。

ところで、先ほど結論を保留していた「秋や来る露やまがふ」であるが、やはり「秋が来たのか、それで(そして)

露が置いて見まごうたのか」と解釈しておきたい。「秋が来てもないのに露が置く」という、「秋や来る」歌自体に表現されていない内容を補って解釈する必然性は考えられないし、「Aや／＼Bや…」の語形が必ずしも二者択一の疑問になるわけではないことを考えれば、無理にそのような形に合わせて解釈する必要もない。

三 一首の解釈

「月やあらぬ」歌の解釈を考える上で、前章では、語法的には一番の要点となるであろう「Aや／＼Bや…」について考えてきた。ここでは前章の考察を踏まえた上で、「月やあらぬ」歌、一首の解釈について考えてみたい。

「一首の解釈」と断ったのは、通常この歌が論じられる際には、「女を失った翌年の春に詠まれた」「去年と同じ場所较去年と同じ月夜に去年と同じ梅の花盛りに詠まれた」といった、伊勢物語・古今集に記された詠作事情を前提として解釈するのが一般的だからである。むろん、伊勢物語歌・古今集歌として解釈するのであれば、それは当然のことであるが、一首の歌の解釈を考える場合に、伊勢物語・古今集が正しく詠作事情を伝えている保証がない限りは、無制限に解釈上の前提にするべきではないであろう。

「この「月やあらぬ」の歌は制作事情の叙述と密接にかかわっており、制作事情がわからなければまったく鑑賞できぬ歌である」⁽⁵⁾として意識的に物語に記された詠作事情と歌とが結びつけられることもあるが、多くの場合無意識のうちには解釈の前提としているようにも思われる。だが、歌がどれほど物語と密接に結びついていたとしても、また伊勢物語の記述を踏まえることでこの歌自体の趣深さがどれほど増すものであったとしても、それは物語作者の技量が優れていることの証明にはなっても、物語が詠作事情を正しく伝えていることの証明にはならない。一旦伊勢物語・古今集から離れて、その場合に「月やあらぬ」歌一首にどのような解釈の可能性があるかを検討する。

まず、初句の「月やあらぬ」について考える。この「月やあらぬ」については、「月や昔の月にあらぬ」の略として、「月が(は)昔の月ではないのか」といった解釈をすることが一般的であるが、「月やあらぬ」の詠者の眼前にある月は、……昨年までの月とは異なる姿で輝いているのである。それは、個としての月の不在を意味する。「月あらず」ということなのである」とする小松光三氏の説⁽⁶⁾、「今、仮に助詞「や」をとると、「月(は)あらず」となる。直訳すると、「月は、そうではない。」「月は、違う」となる」とする竹岡正夫氏の説⁽⁸⁾、「「あらず」とい

う慣用語の連体形で「あらぬ月」の意であり、違う月、別物の月」とする佐伯梅友氏の説⑤、「月やあらぬ」とは、月の存在自体に対する疑問（反語）の表現、すなわち、「月がないのか」という表現として理解せざるをえない」とする保科恵氏の説⑥など、通説とは異なる見解も示されている。いずれも伊勢物語、古今集の記述を前提としており⑦、ここでの検討とは方向性が異なるが、一首の歌の解釈を考える上でも、こうした解釈の可能性は考える必要がある。

一般的に「月やあらぬ」は「月や昔の月にあらぬ」の省略と考えられているが、なぜこのように補わなければならないのだろうか。自明の前提であるかのように述べられることが多い。根拠がはっきりしない。おそらくは、「月やあらぬ」をこのまま解釈しようとする場合に「やあらぬ」をどう解するかが案外難しいというのが理由の一つではあるろうが、それ以上に、「起きもせず寝もせず」「君や来し我や行きけむ」「見ずもあらず見もせぬ」といったような、対立する事柄を対にしたような表現が業平歌、伊勢物語歌に多いことから、同様の構造を持つものとしてこの歌を解釈しようとする力が、意識的にも無意識的にも働くことが大きな理由ではないかと思われる。だが、それは一首の歌を解釈する合理的な根拠にはなり得ないし、そもそも、「月」と「春」は、「起き」と「寝」・「君」と「我」・「見

ず」と「見」などとは異なり、語句として対立するものにはならず、また「Aや／＼Bや…」という形が必ずしも対にはならないことも前章に見たとおりである。「月」と「春」が「月」と「(梅の)花」の言い換えであり、対になっているとする見方もあるが、このことについても合理的な根拠があるわけではない。

「月や昔の月にあらぬ」と補うことにはつきりとした根拠がない以上、「月やあらぬ」は「月やあらぬ」としての解釈をまず考えるべきであろう。この場合、「やあらぬ」を語法的にどのような考えるかが大きな問題となる。「あらぬ」、あるいは「あらぬ」を「や」の結びの連体形と考えたときその原形となる「あらず」について、大まかな分類を考えると、

- ①形容詞・形容動詞や断定の助動詞などに下接した、実質の意味がない「あり」に打消の「ず」が接続したもの
- ②存在や生存などの実質的な意味がある「あり」に打消の「ず」が接続したもの
- ③会話などで否定的な応答の語としての「あらず」
- ④体言を伴って「違う、異なる」といった意味になる

「あらぬ」といった分類が考えられる。「月やあらぬ」の形から①と③になることはなく、辞書的な語意だけから考えれば、「ない」あるいは「違う(月)」と訳すことになるが、「あら

ぬ」をこのように訳した場合、歌はどのような意味になるか、また、そうした解釈が可能であるか、併せて検討していくことにする。

「あらぬ」を「ない」の意として「月がないのか」と訳すことには、少なからず違和感を感じられるかもしれない。この歌の場合、「月のおもしろかりける夜」「あばらなる板敷に月の傾くまでふせりて」詠まれた歌であることを前提として解釈されてきたことを思えば、その違和感は当然のものであるかもしれない。だが、その前提を外して考えてみると、「空に月がない」という状態は、朔日の夜であったり、曇り空で月が見えないなど、それほど珍しいことでもない。月の明るい夜に見た「昔の春」の景色が、月のない今夜は全く違つて感じられる。それが仮に梅の花を詠んだものであるとするのであれば、「昔の春」は月に照らされた梅を視覚的にも嗅覚的にも感じられたのに対して、今夜は月のない闇夜で嗅覚的にか感じられない、同じように梅は咲いていて、それを見るのもおなじ私であるはずなのに、「昔の春」とは違つて感じられるといった、いかにも「古今集歌らしい」情景が浮かんでくる。歌一首の内容としては、「月がないのか」と訳しても十分に解釈が可能であると言える。

一方、「あらぬ」を「違う（月）」の意味で考える場合は、「月が違う（月）」である状態を考えることになる。

当然のことではあるが、日によつて月の形、月の出・月の入りの時刻も変わるし、雲や霞によつて月の見え方が異なることもあり、「月がない」よりは多様な状況が考えられる。だが、どのような「違い」を想定するにしても、月が「昔」のその夜の月とは違い、見るのは同じ私であるのに春が「昔の春」とは変わってしまった、とするのは、前述の「月がない」場合と同様にあり得る解釈であると言える。また、「違うはずのない月までもが違つて感じられる」とするのがこの歌のこれまでの一般的な解釈であるが、このように解釈するのは、一つには、「月や昔の月にあらぬ春や昔の春ならぬ」と補つて、毎年同じようにめぐつてくる春と対にして月を捉えるからであり、一つには、不変の自然に対して人は変わっていくとする古今集歌らしさを前提に考えるからであろう。前者に合理的な根拠がないのは前述のとおりであるが、同じ理由で後者も歌の解釈の決め手にはならない。そもそも、古今集に「春」や季節の循環を不変の自然の象徴として人間と対にする歌は数多く見られても、「月」自体をそのような意味で用いている歌は他に見られない。やはり、「月が違う（月）」については、「違うはずがない」ことを前提として考えるべきではなく、単純に「違う」ものとして考えておくべきであろう。

「あらぬ」を「ない」「違う（月）」と訳した場合の具体的な内容を右のように考えたが、「あらぬ」をこのように

解釈することは可能であろうか。「あらず」「あらぬ」の用例の多くは①であり、それは古今集歌についても同様であるが、「月やあらぬ」をこのままの形で解釈することを考えると、①では文法的に説明がつかない。①以外の形で用いられた「あらず」「あらぬ」は、古今集歌では次に挙げる二種類、四例がある。

いにしへにありきあらずは知らねども千歳のためし君
にははじめむ (三五三)

は、「千年の長寿の例」が「あつたのか、ないのか」の意で、「あらず」は「ない」と存在を否定する②の意味と考えられる。

こぞの夏鳴きふるしてしほととぎすそれかあらぬか声
のかはらぬ (一五九)

秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよす
るか (二七二)

かげるふのそれかあらぬか春雨のふる日となれば袖ぞ
ぬれぬる (七三一)

と、「くかあらぬか」の形になる三例は、それぞれ「それ(去年と同じほととぎす)か違う(ほととぎす)か」「花か違う(もの)か」「それ(その人)か違う(人)か」の意味であり、いずれも「違うもの」「別のもの」の意味である。分類上は④の「あらぬ」で下に続く体言が省略された形と見るべきであろう。このように、古今集において、

②と④に分類できると考えられる「あらぬ」を見出せるが、古今集歌において「くやあらぬ」の形は類例がなく、平安時代の和歌を見渡してみても用例は少ない。比較的伊勢物語・古今集に近い時代の用例としては、

冬やあらぬ春やさきだつ花見ればそらおぼめきもしつ
べかりけり (斎宮女御集)

少し時代が下るが、

君やあらぬわが身やあらぬおぼつかかな頼めしことのみ
なかはりぬる (千載集 九二七)

見しままのありしそれともおぼえぬはわが身やあらぬ
人やかはれる (とりかへばや物語)

といった例があるが、いずれも「月やあらぬ」歌の表現に影響を受けているようであり、「月やあらぬ」の解釈を考える上での確実な根拠とは考え難い。ただ、どの例も②の存在や生存を否定するような意味での「あらぬ」とは考えられず、「くやあらぬ」が「くがないのか(存在しないのか)」「の意味になる明らかな例は見出せない。また、③の会話文中で用いられるような「あらず」が「や」の結びで「あらぬ」となったと考えるわけにもいかない。決定的な根拠となるような確実な用例がないが、ここまでの検討から①④を消去法で考え、また古今集での「あらぬ」の用例を併せて考えると、「月やあらぬ」の「あらぬ」は④に類するものであり、「違うもの」「別のもの」とする解釈

が適切であると考える。このように考えると、「月やあらぬ」は「月が違う月か」と解釈することになる。

では、「月が違う月」と「春が昔の春ではない」の関係はどのように解釈するべきであろうか。前章で検討した「AやBや…」の例に倣って考えれば、「月が違う月」と「春が昔の春ではない」のいずれかを二者択一で問う意味の他にも、「月が違う月」と「春が昔の春ではない」を並列的に疑問にして問う意味や、前者が後者の原因・理由となる形で問う意味などが考えられる。「月やあらぬ」と「春や昔の春ならぬ」が形としては対になっていないことは前章で確認したとおりであり、このような形の「AやBや…」は二者択一の意味では考えにくいと思われるが、「春が昔の春ではない」は花も月もさまざまなものを含めて春の様子が昔とは異なることを言う表現であろうから、単純に「月が違う月」と「春が昔の春ではない」を並列する表現であるとも考えにくい。実際の詠作事情をどのように想定するかによつては、別の解釈の可能性が生じるかもしれないが、歌に詠まれた語句の意味を純粹に考えると、「月が違う月か。それで、春は昔の春ではないのか」、「月が違う月か。そして、春は昔の春ではないのか」とする解釈が最も可能性の高い解釈なのではないだろうか。

ところで、右のような解釈をした場合、「昔の春」とはいつの春と考えられるだろうか。伊勢物語・古今集に記さ

れた詠作事情を前提とした解釈では、当然のごとく「一年前の春」であるが、伊勢物語・古今集と切り離してみると、「一年前の春」を「昔の春」と言うのにはやや違和感を覚える。ただ、当時の用例に即して考えてみると、

元良のみこ兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを、
法皇の召してかの院にさぶらひければ、えあふこ
とも侍らざりければ、あくる年の春、桜の枝にさ
してかの曹司にさしおかせ侍りける

元良のみこ

花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひに
けれ

(後撰集 一〇二)

(題知らず)

権中納言敦忠

あひ見てののちの心にくらぶれば昔はものも思はざり
けり

(拾遺集 七一〇)

というように、近い過去であったも現在とは状況が異なることをもって「昔」という語を用いていると考えられる例は見られるから、「恋人と離ればなれになる前の去年の春」を「昔」と表現することは不自然ではない。だが、伊勢物語、古今集の記述を離れば、「昔」の意味は必ずしも「一年前の春」に限定されるものではない(同様のことはここで例として挙げた後撰集の「花の色は」歌にも言える)し、伊勢物語歌、古今集歌においては、「一年前」といった近い過去の一時点を「昔」とする例は他に見られない。伊勢

物語歌における「昔」の用例は、

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにしものを

(二十四段)

いにしへのしづのをだまき繰りかへし昔を今になすよ
しもがな

(三十二段)

五月待つ花たちはなの香をかげば昔の人の袖の香ぞす
る

(六十段)

の三例であり、いずれもかつての恋愛や恋愛が始まった当初の過去を指すものと考えられるが、具体的にどの程度「昔」であるのかは歌自体からはわからず、物語本文からわかるのも、「三年来ざりければ」とする二十四段の例のみである。また、古今集歌において「昔」の用例を確認すると、漠然と遠い過去を示す「昔」が多い中、具体的な内容をもち「昔」としては、

いそのかみふるき都のほととぎす声ばかりこそ昔なり
けれ

(一四四)

のような旧都がまだ都であったころの「昔」、
色も香も昔のこさににほへども植ゑけむ人の影ぞこひ
しき

(八五一)

のような故人がまだ生きているころの「昔」、
色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまり
ける

(五七)

のようなまだ若かったころの「昔」、などの例を見ること

ができる。こうしていくつかに類型化できる古今集歌の「昔」に即して、あくまでも一つの試みとして、これらの「昔」を、「春や昔」の「昔」にあてはめてみると、「春がここが都であったころの昔の春ではないのか」、「春があの人生きていたころの昔の春ではないのか」、「春が若かったころの昔の春ではないのか」となる。ここで、これもあくまでも仮にであるが、「昔」を「若いころ」と仮定して「月やあらぬ」歌を解釈してみる。

月が違う月か。それで春が（私が若かったころの）昔の春ではないのか。私の身一つは変わらざる私の身のままで。

今、目の前に見える「春」は、若いころに見た「春」の景色とはちがって見える。人生の時間が無限にあるかのようにさえ思っている若いころ、ある程度の年齢になってそうではないとはつきりと自覚したころ、老年に至って自分であと何度の春に巡り会えるのかと考えるころ、見る側の意識が変わっていればそれに応じて「春」は異なったものに見えるのである。歌の作者にも、ちがうのは「我が身一つ」であることはよくわかつている。だが、人間は見たくない現実からは目を背けるものでもある。「自分が年老いたから春が昔の春ではない」とはわかつてはいても考えたくはない。「きつと（記憶に残る「昔の春」のあの日は）月が違う月だから春が昔の春ではないのだろう」と考えて

自らを納得させようとする。このようにして考えた一首の解釈も、また「古今集歌らしい」ものと言えそうである。

あくまでも、「昔」を「若いころ」の意味で仮定した場合の解釈の一例であるが、「昔」の意味の取り方によつては、また異なる解釈も可能であろう。むしろ、これらも「昔」の古今集歌の用例にしたがって考えた一解釈にすぎないものであり、ここで挙げたような解釈例を絶対の解釈としようというわけではない。しかし、伊勢物語・古今集に記された詠作事情を離れて見たとき、歌の語句の解釈だけから考えれば右に記したような解釈を拒むことはできず、一首の歌としては他の解釈の余地があることは確認できる。逆に言えば、伊勢物語・古今集の記述にしたがった解釈も、そこに記された詠作事情を前提として考えた場合の一解釈であるとも言えるのではないだろうか。

四 伊勢物語歌、古今集歌として

最後に、伊勢物語、古今集の記述を前提とした場合の「月やあらぬ」歌の解釈について考える。むしろ、この場合は、「昔」は「一年前の春」であり、「梅の花盛り」に「女と会えなくなった去年の春のことを思いながら」詠んだという詠作事情を前提として解釈することになるが、まずは確

認のため、伊勢物語、古今集の本文を引用する。

昔、東の五条に、大后宮おはしましける、西の対にすむ人ありけり。それを、本意にはあらで、心ざしふかりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。またの年の正月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、みて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもと
の身にして

とよみて、夜のほのぼのと明るくに、泣く泣くかへりにけり。

五条の後の宮の西の対にすみける人に、本意にはあらでものいひわたりけるを、正月の十日あまりになむほかへかくれにける。あり所は聞きけれど、え物もいはで、またの年の春、梅の花盛りに、月のおもしろかりける夜、去年をこひてかの西の対にいきて月のかたぶくまであばらなる板敷にふせ

りてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

伊勢物語と古今集の先後関係については、少なくとも「月やあらぬ」歌に関する限りは、従来も指摘されているように、この歌の詞書が古今集の詞書としては異例の長さであり物語性も強いことから、「伊勢物語の文章によつてそのまま記したものと解すれば問題はないが、そうでなければ甚だ異常である」^(註)と見るのが妥当であると考えられるので、ここでは伊勢物語が古今集に先行することを前提として論を進める。

伊勢物語と古今集の記述の相違については、「立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず」の有無が疑問説との関わりでよく取り上げられるが、それ以外にも、この両者を見比べてみると、歌を詠む前後の記述について、大きな相違があると言える。歌を詠んだ状況について、伊勢物語の「うち泣きて」以下の内容から考えると、「月が西の空に傾くまで泣き臥せり、去年を思い出しながら歌を詠み、夜がほのぼのと明けるころ泣きながら帰って行った」を一連の流れとして捉えることができる。そのように考えると、男は夜明け近く月が西の空へと傾いていく時に歌を詠んだ、ということになる。「十日ばかり」の月であれば、

夜半過ぎには沈んでしまい、「夜のほのぼのと明くる」ころに西の空にあることはない。夜明け頃に西の空へ傾いていく月とすれば、ここで「月やあらぬ」と詠まれた月は二十日前後の月ということになる。前年女を失ったのが「正月の十日ばかり」であるとするならば、幸せだったころに見ていた昨年の月は「十日ばかり」よりも以前の月であり、明らかにここで詠まれている「月」とは異なることになる。なお、ここで示した、「月やあらぬ」と詠まれた「月」が「二十日ころの月」であろうとする解釈は、かなり古い時代から考えられていたと思われる。

五条の後の宮の西の対なる人に、しのびてものいひはべる、正月十日ばかり、ほかへまかりければ、ものもえいはで、またの年の春、梅の盛りに、かの対にまかりて、二十日の月のかたぶくまであばらなる板敷にながめて、
(古今集荒木切)

後の宮の五条の西の対の西のつまにすむ人を、忍びてものいひ侍るが、時は正月十余日ばかりに、梅花ざかりに、語らひける人の、行き方も知らせず、音もせずなりにければ、またの年の春の花盛りに、かの対にまかりて、二十日の月のかたぶくまであばらなる板敷に侍りて、
(業平集(西本願寺本))

西本願寺本系統の業平集に記されていることから考えれば、少なくとも平安時代末期にはこのような詞書が流通し

ていたことになる。「二十日の月」とする本文は、後人による古今集本文の改変、あるいは伊勢物語の記述からこの月を「二十日ころの月」とする注釈が本文へ混入してしまつたことなどが疑われるが、このような詞書が存在すること、当時において「月やあらぬ」歌の「月」を「二十日の月」とする読み方が明らかに存在していたと考えることができる。

さて、ここまでの検討を踏まえて、伊勢物語の記述から、去年幸せな気持ちで見ていた月は「十日以前の月」、今年泣きながら見ている月は「二十日ころの月」であるとする、「変わるはずのない月までもが変わつて見える」という解釈は成り立たない。やはり、文字通り「月が違う月」として解釈するべきである。このように考えることで初めて、「正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり」とする記述も意味を持つようにも思える。一方、古今集の場合、歌の後の「夜のほのぼのと明くるに」を欠いているために、「月」がどのような「月」であるかは、詞書からははっきりとわからなくなっている。何らかの意図があつて「夜のほのぼのと明くるに」を省いたのか、あるいは「月が違う月」であることを自明のこととしてあえて記すまでもないと考えられたのか、はっきりとはわからないが、いずれにしても、古今集においては「月」がどのような月であるのかが限定できなくなっている。

では、伊勢物語の記述に即して「月やあらぬ」歌全体を解釈するとどうなるだろうか。「月やあらぬ」については、伊勢物語の記述からも、やはり「月が違う月か」とするべきであり、昨年春見た「十日以前の月」と今見ている「二十日ころの月」が異なることを問題にしていると考えられる。「春や昔の春ならぬ」は「春が昔の春ではないのか」と問う表現であるが、伊勢物語の「立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず」を踏まえれば、「春が昔の春ではない」のは明らかなことであり、「同じなのか、ちがうのか」とどちらであるのかを問題にしているのではなく、ちがうことを自明のこととして「どうしたことか」と問いかけるような表現であると考えられる。これらの点を踏まえれば、「月は違う月か。春は昔の春ではないのか」と二つの疑問を単純に並列にしたり、「月が違う月か。それとも春が昔の春ではないのか」と二者択一の疑問としてたりして解釈するよりも、「月が違う月か。そして春が昔の春ではないのか」「月が違う月か。それで春が昔の春ではないのか」とする解釈が適切であろう。前章で検討した「一首の解釈」として最も適切な解釈は、伊勢物語の本文を併せて考えても最も適切な解釈であると言える。この場合、「わが身一つはもとの身にして」は、目に見える春の様子が昨年とは全く変わつて見えるのに、それを見ている自分は何も変わつてないというそのままの意味で考えて問題は

ない。全体を通して訳せば、

月が違ふ月か。それで春は一年前の春ではないのか。
私の身一つは変わらざるもとの私の身ままで。

春の景色が一年前の春の幸せだったころと何もかもが変わつて見えるのは、月が違ふ月であるのも一因ではあるが、それ以上に女を失つて作者の境遇・心境が大きく変わったためである。女を失つて悲しみに暮れているという現実からは「わが身一つはもとの身にして」と目を反らし、すべてを「月が違ふ月」であるせいにするが、作者には本当はそうではないことがわかりすぎるくらいにわかっている。伊勢物語における「月やあらぬ」歌はこのように解釈できるのではないだろうか。

一方、古今集歌としての「月やあらぬ」歌を解釈しようとする場合、伊勢物語とは異なる事情として、「立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず」の記述がないこと、また「夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり」の記述がないことから、解釈の可能性が広がることと、古今集としての配列の問題を考える必要がある、伊勢物語の場合とは異なる解釈が生じる余地があることは否定できないが、少なくとも右のような解釈を拒む根拠はないように思われる。

五 結び

「月やあらぬといひ、春や昔のなど続けるほどの、かぎりなくめでたきなり」（古来風抄抄）とも評される「月やあらぬ」歌の流麗な調べは、あたかも「月やあらぬ」と「春や昔の春ならぬ」が対になる表現であるかのように考えさせ、「在原業平はその心あまりて詞たらず。しぼめる花の色なくてにほひ残れるがごとし」（古今集仮名序）から、業平歌は言葉にされ尽くしていない深い余情を含むものがあり、言葉にされていない表現を補うことが半ば当然のこととして意識されてもきた。また、伊勢物語第四段の、歌と一体化した格調高い文章は、古くから多くの読者を惹き付け、この歌を物語と切り離すことを難しくさせてきた。こうしたさまざまな力が働くことにより、読者の中には拭いがたいいくつもの先入観が生み出されてきたのではないだろうか。そうした先入観を注意深く取り除いていくことが大切であるのは、この歌の解釈にのみ限ったことではないが、古くから愛読され、解釈をめぐる多くの議論のあるこの歌の解釈を考える場合、そのことは他の場合にもまして重要なことであるように思えるのである。

注

- (1) 徳田政信「伊勢物語「月やあらぬ」考(上)——宣長の反語説は成立するか——」(『中京大学文学部紀要』八—二 昭和四十八年十一月)
- (2) 工藤重矩「月やあらぬ」の解釈—方法として—(『中古文学』三七 昭和六十一年六月)
- (3) 飯田季治「業平朝臣の『月やあらぬ』の歌に就きて」(『大八洲』二五—五 明治四十三年五月)
- 『評釈業平全集』(如山堂書店 明治四十年六月)も同様。
- (4) 小谷野純「『更級日記全評釈』(風間書房 平成八年九月)
- (5) 厳密に言えば、「夜や暗き道や惑へる」(一五四)は対にはなっていない。現代の注釈ではこの歌も二者択一の疑問で解釈されているが、「わが宿をほととぎすの過ぎがたく鳴くは、夜や暗くして道まどへるにかとなり」(『榮雅抄』)、「歌の心は、ほととぎすのわが宿のほとりにしきりに鳴くは、わがためにはあらじ。夜の暗きによりて、道やまどへるとなり」(『延五記』)とする解釈もある。
- (6) 鑑賞日本古典文学『伊勢物語 大和物語』(片桐洋一編 角川書店 昭和五十年十一月)
- (7) 小松光三「月やあらぬ」の背景—漢詩に典拠を求めて—(『王朝』九 昭和五十一年六月)
- (8) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』(右文書院 昭和五十一年十月)
- (9) 『伊勢物語全評釈』(右文書院 昭和六十二年四月)も同様。
佐伯梅友「古文を文法的に読むこと」(『国語国文論集』一

四 昭和六十年三月

- (10) 保科恵「和歌表現と受容過程—勢語古今の「月やあらぬ」(『記念論集松籟』 平成十七年十二月)
- (11) ここで挙げた四氏の説のうち、小松氏は「原理的な観点からいえば、たとえ、原作歌と収載引用歌とが、同一の表現内容をもっていたとしても、別個の歌と認定すべきである」としながらも『古今和歌集』と『伊勢物語』とを原拠として、考察を進めることは、現実的な意味での妥当性をもっている」として、やはり伊勢物語、古今集の記述を前提として「月やあらぬ」歌を解釈している。
- (12) 片桐洋一『伊勢物語の研究(研究編)』(明治書院 昭和四十三年二月)

(すずき・たかし 本学准教授)